

## 3月2日 年間第8主日

ホセ 2:16～22    II コリ 3:1～6    マコ 2:18～22

### 1. マコ

vv.19-20 「イエスは言われた。“花婿が一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿が一緒にいるかぎり、断食はできない。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる。”」

今年の四旬節は、今週の水曜日から始まります。年間の主日は今日の第8主日の後、四旬節と復活節を経て、6月15日の三位一体の主日を迎えるまで中断されます。典礼暦では断食の期節とそうではない期節とが区別されているように見えます。四旬節はその全体が断食の期節であって、主日のミサでは栄光の賛歌を歌わず、アレルヤ唱に代えて四旬節の詠唱が用いられます。祭服の色は紫です。同じ紫が用いられる待降節も断食の期節に準じて栄光の賛歌を歌いません。しかしアレルヤ唱は歌われます。

キリスト教会の典礼暦で四旬節が断食の期節とされるのは、それが特別に主の受難と死の追憶の時だからであり、それに対して四旬節以外の期節は基本的には断食の時ではないということが出来ます。このような両面をそれぞれ十分に理解することを、今朝の福音書の日課は私たちに求めているのです。

旧約聖書の律法で定められている断食は、贖罪日の苦行(レビ 16:29 以下)だけですが、当時のファリサイ派の弟子たちは週に二回、月曜日と木曜日に断食をしていたようです。また洗礼者ヨハネの弟子たちは、その師の死(マコ 6:14 以下)を悼んで断食をしていました。しかし初代教会の人々は、断食ということを継続的な通年の慣習とはしなかったのです。一方では四旬節の断食の慣習が非常に早い時期に起源していることは確かなのですが、他方では教会という新しい群れが基本的には「断食はできない」時の中を歩んでいるのだということを知っていました。教会は「神の国は近づいた」(マコ 1:15) 時代の中にあり、主の再臨とすべてのキリスト者の復活の日を「忍耐して待ち望む」(ロマ 8:25) だけではなく、ミサを通して日々祭壇のキリストにお会いしているからです(ヨハ 14:19)。

このように教会は新しい時代、すなわち「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタ 28:20) 時代の中にあるのですから、基本的には「断食はできない」という性格を強く持っていることとなります。

### 2. ホセ

紀元前8世紀の北王国の預言者ホセアは、特異な比喻によって王国の政治と歴史の問題を取り上げ、神に背くイスラエルの罪とそのような民への神の真実の愛を語りました。今朝の日課には、ホセアの終末思想の一端が読み取れます。それはイスラエルの新しい出エジプトを示唆するもので、全く宗教問題であって社会問題ではないことを私たちは理解せねばなりません。「その日が来れば」(v.18)、「その日には」

(v.20) は、使徒パウロの「キリストの日に」(フィリ2:16)に通じるものであり、「自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと、…… 誇ることができる」(フィリ2:16)日と同じです。その日には主がイスラエルと「契りを結び、正義と公平を与え、慈しみ憐れむ」(v.21)のです。

### 3. II コリ

使徒パウロは自分が育てたコリントの教会の信徒たちのことを、「わたしたちの推薦状」(v.2)と呼びました。使徒とは神からキリストの新しい契約に仕える特別な資格を与えられた者であると、パウロは理解していました。それはキリストの霊に仕える資格であって、人々を新しい命に生かす働きです。

この使徒たちに委ねられた特別な使命が、その後の時代の司教たちによって代々受け継がれて来ていて、そのことによって現代の教会も“使徒継承の教会”と呼ばれています。ですから私たちの教会は、いわば現代の司教団の推薦状であり、ひいては使徒たちの推薦状となるのです。

### 4.

教会憲章は、「司教団は、…… 全教会のうえに最高、完全な権能を持つ主体である」と述べ、その権能の行使は公会議を通してであると説明しています(教会憲章 22)。第二バチカン公会議から始まった典礼刷新は現代の教会のナビゲーターであり、さらに将来の教会形成の土台であります。それによって教会は「新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れるものだ」という聖書の言葉を具体的に実現して行きます。

私たち現代のキリスト者は、今一度司教団に受け継がれて来ている主キリストからの特別な委託に目を向け、その現代における権能の行使である第二バチカン公会議の公文書群を大切に考えなければなりません。古い服を脱ぎ、古い皮袋を捨てることは、現代の教会が司教団の推薦状、ひいては使徒たちの推薦状となるための重要な要素なのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 3月9日 四旬節第1主日

創 9:8～15    1ペト 3:18～22    マコ 1:12～15

### 1. マコ

受肉された神の子イエス・キリストの生涯は、サタンの働きに対する戦いでありました。そしてその受難と復活こそはこの戦いの頂点であったことを、私たちは今年も四旬節を通して学んで行きます。

主の洗礼のときに天から降ったのと同じ“霊”が、イエスを荒れ野に送り出しました。イエスが主の僕としての使命へと任じられたとはどういうことかが、明らかにされます。サタンから誘惑を受けるためでした。私たちはこの伝承を、主イエスがたまたま偶然に、あるいは気まぐれに荒れ野で自分の能力を試した物語りとして読んでではありません。新約聖書はサタン(悪魔)という呼称で、「闇の世界の支配者」(エフェ 6:12)、「この世の支配者」(ヨハ 16:11)、すべての人がその中に閉じ込められていた「罪と死との法則」(ロマ 8:2)のことを語っています。私たちの罪を身代わりに負うためにヨハネからバプテスマをお受けになったイエスは、私たちへのサタンの誘惑をも自ら荒れ野でお受けになりました。十字架でのサタンとの戦いの前哨戦が、ここで繰り広げられました。サタンがイエスを主の僕としての使命から道をそらせようと誘惑している間、助け手はだれもおらず、ただ野獣だけが(イエスの孤独の象徴)いました。

40日間の戦いが終わって、天使たちがみ許に仕えていました。父なる神の霊が御子イエス・キリストの生涯を導いて行かれます。それは十字架の死に至る道でありました。そして“霊”が共にいて導かれることは、御子のサタンとの戦いがいささかでも軽減されることを意味しませんでした。

### 2. 創

平和は戦争を禁止あるいは放棄すれば保てるものだと考えている人は、歴史を知らない夢想家です。ノアの契約の物語りに、人間が不要な争いを抑制すれば実現する本来の世界の姿を思い描く人は、単なる空想家に過ぎません。この世界には戦争があり、飢饉があり、抑圧があり、貧困があり、不安があります。しかしイスラエルは、「あなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める」(v.15) 神を信じました。自らの救いの御業によって、これを実現される神を信じました。この神の救いの実現に至る歴史を、“救済史(Heilsgeschichte)”と呼びます。新約聖書はこの救済史の枠の中で、受肉された神の子イエス・キリストの十字架と復活に至る生涯全体を理解しているのです。福音書における主の洗礼も、主の荒れ野でのサタンからの誘惑の出来事も、実にこの救済史の一環として理解されており、ノアの契約の物語りはこの救済史の目標の神話的表現であるということが出来ます。

### 3. 1ペト

v.18 「キリストも、罪のためにただ一度苦しまれました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しま

れたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。」

教会は四旬節を、特別に神の救済史における御子イエス・キリストの御業に注目する時として守ります。洗礼志願者も会衆と共に、「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ9:12) キリストに向かって目を上げます。この vv.18-22は古代教会の洗礼式の式文の一つであって、私たちの罪を身代わりに負い、私たちへのサタンの攻撃を自ら引受けてくださった十字架と復活のキリストが告白されています。

私たちが共にミサをささげるとき、祭壇でお会いする方はこの復活のキリストであり、私たちは皆洗礼によってこのキリストの救いを受けました。それは私たちが「罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。」(2:24) アーメン。

## 3月16日 四旬節第2主日

創 22:1～18    ロマ 8:31～34    マコ 9:2～10

### 1. マコ

主の変容の出来事によって、三人の弟子は主の復活の日の栄光とその来臨の輝きを、いわば将来の教会の先取りとして体験することを許されました。主イエスが「自分を無にして、……人間の姿で」(フィリ2:7)歩まれたときにも、彼は神であり、栄光は彼のものであったことを弟子たちが理解したのは、その復活の後になってからであったと、この物語りは証言しています。

v.10 「彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。」

四旬節は、主の受難と復活からなる過越の祭儀に備えるための期節であります。この期節に、信者はすでに受けた洗礼の記念と償いの業を通して、また洗礼志願者はその準備教育によって、主イエス・キリストの復活の栄光と将来の来臨の日の輝きに目を向けます。教会はこの栄光と輝きに照らされてこそ、キリストの福音を本当に理解し、神の国を待望する信仰に生きることが出来るのだということを、この期節の各主日の聖書朗読配分は私たちに教えてくれます。

実は今朝の福音書の日課は、8月6日の主の変容の祝日と同じもので、16世紀の宗教改革によって誕生したプロテスタントの中のルター派の教会では、これを四旬節の始まる四週間前の主日で用いるように変更しています。カトリック教会ではその後いつ頃からか、この主の変容の祝日の福音書の日課を四旬節第2主日にも朗読するように変更したようです。恐らくその延長線上で理解すべきだと思われるのですが、第二バチカン公会議後の典礼刷新によって、カトリック教会では四旬節第3主日以降の各主日の聖書朗読配分が全面的に見直されました。

私たちはこの新しい主日の朗読配分によって、主の復活と来臨の栄光の輝きに照らされたキリストの福音理解と神の国を待望する信仰を、この四旬節に学んで行きます。

### 2. ロマ

私たちすべてのために、その御子をさえ惜みせず死に渡された神の愛を、教会は宣べ伝えて来ました。確かに教会はミサ典礼書や各種儀式書、その中で唱えられる信仰宣言、カトリック教会の代々の時代の公文書、そして聖書によって、使徒たちから伝えられたキリストの福音を現代に至るまで宣べ伝えて来たのです。私たちはこのことを神に心から感謝しなければなりません。

しかし人間一人一人は罪深く、しばしば思い、ことば、行い、怠りによって、キリストの福音に対して目の見えない者耳の聞こえない者となってしまいます。実際私たちの教会の姿は、信者たちがお互いに「神に選ばれた者たち」(v.33)として相手を重んじ、復活のキリストがその人のために執り成してくださっていることを思って兄弟を愛しているのでしょうか。信者たちが互いに親切で礼儀正しいときにも、それが「キリストの

体」(エフェ4:12)としてどの程度造り上げられているかが、問い直されなければなりません。「互いに愛し合う」(Iヨハ3:11)とはキリストの福音の共通理解による結び付きのことであって、それは一つの(神の国の)希望、一つの(キリストへの)信仰による一致と切り離すことは出来ません。

四旬節は、信者たちがお互いを「共に(神の国の)恵みにあずかる者」(フィリ1:7)としてもう一度心に留め直すのに、ふさわしい期節です。

### 3.

教会はその信条の中で、「われは一、聖、公、使徒継承の教会を信ず」と宣言しています。使徒継承とは、教会がいつの時代にも使徒たちから決して離れては存在し得ないということを意味します。

現代は思想的に非常に自由な時代であって、あらゆる種類のキリスト理解、福音理解、宗教理解が世にあふれていますが、それは決していろいろなキリスト教といろいろな教会が、正当に存在し得ることを保証するものではありません。

「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。“これはわたしの愛する子。これに聞け。”」(マタ9:7)

弟子たちはここで、律法と預言者の書(旧約聖書)に書かれている救済史の実現者イエス(ルカ24:44)に「聞け」との天からの声を聞きました。使徒たちが理解したように私たちも主イエス・キリストを理解し、使徒たちが伝えたように私たちもキリストの福音を学ぶことは、21世紀の教会にとっての最重要な課題なのです。       アーメン。

## 3月23日 四旬節第3主日

出 20:1~17    Iコリ 1:22~25    ヨハ 2:13~25

### 1. ヨハ

ヨハネ福音書はこの出来事を、主イエスのエルサレムでの活動の最初に置いています。並行するマルコ福音書の記事はこれを聖週間の初めの部分で語っていますが、いずれも過越祭間近であったという点では一致しています。キリストが私たちの過越の小羊として屠られたこと(Iコリ5:7)と、この記事は深く結びついているのです。

ユダヤ人たちが質問しました。

v.18 「あなたはこんなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せるつもりか。」

イエスは答えます。

v.19 「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」

ユダヤ人たちは、これをヘロデの神殿のことだと誤解しますが、使徒たちは後になって、これがキリストの復活とその結果としての教会の誕生について語られたものであったと、理解するようになりました。

主イエスはエルサレムの神殿の崩壊を指して語られたものではありませんでしたが、恐らくそれは悪意をもって歪曲され、イエスがユダヤの最高法院で大祭司の裁判を受けたときの偽証として用いられます。(マコ14:58)

「死んだ方、否むしる、復活させられた方であるキリスト・イエス」(ロマ8:34)が、私たち共にミサをささげる群れである教会の頭であり、教会はキリストの体です(エフェ1:22-23)。主の死と復活を抜きにしては、キリストの福音は成り立ちません。

### 2. Iコリ

使徒パウロによれば福音の宣教とは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えることであります。十字架を抜きにしてキリストの福音を語ることは出来ません。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ4:25)

また近代のヒューマニズムのように、キリストを抜きにした単なる博愛主義を広めることも、福音の宣教とは違うのです。

“しるし”によってでもなく、“知恵”によってでもなく、ただ十字架にかけられて死に、死者の中から復活させられたキリストを信じる信仰によって、私たちは罪を赦されて神の国を受け継ぐ民に加えられました。この福音は現代人にとっても“つますかせるもの、愚かなもの”ですが、救われた私たちにとっては「神の力、神の知恵であるキリスト」(v.24)の宣教です。

私たちが祭壇を囲んで共にミサをささげるとき、そこで司祭を代理者として私たちに出会い、御聖体を

一人一人に分け与えてくださるのは、十字架と復活のキリストです。そして教会は、この屠られた小羊であるキリストが神の国を完成される再臨の日を、忍耐して待ち望んでいる(ロマ8:25)のです。

### 3. 出

イエス・キリストの救いは、私たちが先祖伝来のむなしい生活から贖われた(1ペト1:18)“新しい出エジプト”であり、教会はキリストの十字架によって“新しく創造されたイスラエル”(ガラ6:15-16)であります。そのような理解に基づいて、教会は古くから旧約聖書の十戒を大切にきて来ました。ですからキリストの福音にしたがって適切な再解釈が行われて、信者の養成のためにこれが用いられて来たということが出来ます。

私たちはこの十戒の冒頭を、次のように再解釈します。“イエス・キリストは私たちの主なる神、私たちを罪と死の世界から贖い出して神の国を受け継ぐ民としてくださった。だから私たちには他に神があってはならない”と。

安息日に関する戒めは、教会がミサをささげるために集まる主日の理解に援用されて来ました。十戒を単なる優れた道德の教えのように考える人々が、昔から絶えませんでした。しかし教会が主日のミサでこの十戒を朗読するとき、それはキリスト教会に対して語られる神のことばを聞くためであることは、言うまでもありません。そうであるなら、私たちは旧約のイスラエルの民を教会の会衆に読み替え、エジプトからの脱出の出来事をキリストの死と復活による救いに置き替えて、この十戒に耳を傾けるのです。vv.12以下の戒めが、そのような新しいキリストの福音の光に照らして再解釈されなければなりません。

「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである」というヨハネ福音書の言葉が、私たちの心から覆いを除いてくれます(IIコリ3:14-16)。

四旬節の恵みが、ミサをささげる会衆の上にありますように。                      アーメン。



## 3月30日 四旬節第4主日

代下 36:14~23 エフェ 2:4~10 ヨハ 3:14~21

### 1. ヨハ

v.16 「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

神はこの世を愛して、その独り子イエス・キリストを信じる者が皆、救われて永遠の命を得るようにしてくださいました。私たちは今、そのイエス・キリストの受難と復活に、特別に心を向ける四旬節を歩んでいます。

イエス・キリストを信じるとは、その受難と復活を信じることであり、さらに洗礼によってキリストの死と復活に結ばれること(ロマ 6:3 以下)に他なりません。キリストを死者の中から復活させた父なる神は、信じて救われた人々をやがて終わりの日に神の国へと復活させてくださいます。

教会が使徒継承によって受け継ぎ、宣べ伝え続けて来た救い主は、十字架と復活のキリストであります。かつてイスラエルの民が荒れ野で罪を犯して炎の蛇にかまれたとき、モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げました。「蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た」(民 21:9) と伝えられています。そのように教会も十字架に上げられたキリストを仰ぎます。

さらに神はこの十字架の「キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来たるべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました」(エフェ 1:20-21)。私たちがミサでお会いする祭壇のキリストは、この栄光の(上げられた)キリストであります。

w.14-15 「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

### 2. 代下

ダビデ～ソロモンの王国が分裂して生まれた南北イスラエルのうち、北王国は紀元前 721 年にアッシリアによって滅ぼされ(王下 17 章)、その後 130 年余存続した南王国も遂に紀元前 587 年にバビロンの王ネブカドネツアルによって征服されました。歴代の王とその民が罪を犯した結果であったと、旧約聖書は述べています。

v.16 「それゆえ、ついにその民に向かって主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなった。」

w.19-20 「神殿には火が放たれ、エルサレムの城壁は崩され、宮殿はすべて灰燼に帰し、貴重な品々はことごとく破壊された。剣を免れて生き残った者は捕えられ、バビロンに連れ去られた。」

これがいわゆる“バビロンの捕囚”と呼ばれている出来事です。

しかし御自分の民を滅ぼす神は、同時にこれを顧みて将来を約束される神でありました(エレ 29:10 以下)。ペルシアの王キュロスの第一年(紀元前 538 年)、この神の約束によってイスラエルの歴史が再び始まります。この当時の希望に満ちた喜びを、第二イザヤが見事に歌っています。

「慰めよ、わたしの民を慰めよと、あなたたちの神は言われる。

エルサレムの心に語りかけ、彼女に呼びかけよ、

苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。

罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。」(イザ 40:1-2)

この神の救済史の過去の出来事が、イエス・キリストの救いに与かる私たち教会に光を照らし、終わりの時に実現されるキリストの秘められた計画(コロ 1:26-27)を明らかにします。

### 3. エフェ

私たちキリスト者にとって救われているとは、新しくキリストと共に生かされ、新しく神に造られているということです。それは「自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(v.8) 神は洗礼の秘跡によって私たちに新しく神の子として(1:5)生まれさせてくださいました。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。」(II コリ 5:17)

ですから私たちキリスト者の希望は、神の約束が実現する天の国にあります(フィリ 3:20-21)。「わたしたちは、その善い業を行って歩む」(v.10) ということの意味は、私たちが神の国の相続人としての恵みの中でキリストの体である教会を造り上げて行く(エフェ 4:12)ことと固く結びついています。

四旬節の歩みの中にある全世界の教会に、神は今朝語っておられます。「御子を信じる者は裁かれない。信じない者はすでに裁かれている。」(ヨハ 3:18)                      アーメン。